月報

2015 年 5月号
シンガポール日本商工会議所
MCI(P) NO. 001/03/2015
Japanese Chamber of Commerce & Industry, Singapore
Website: http://www.jcci.org.sg

JCCI SINGAPORE

ジャパングリーンメディカルグループ
シンガポール・ロンドン・上海・倉敷

毎日笑顔の
海外生活をサポート

海外生活をサポートする総合医療センター

ジャパン グリーン クリニック

外来診察	予防接種	健康診断・医療検査	理学療法	医療相談

ジャパングリーンクリニック　総合診療のオーチャード本院

診療科目

外来診察（小児科・内科・外科・耳鼻咽喉科・婦人科*・他一般），予防接種*，乳幼児健診*医療検査*，健康診断*，理学療法*（疼痛治療・リハビリ等），各種医療相談（アレルギー*・禁煙*・他）

受付時間　月～金　9:00～12:00，14:00～17:30
土　9:00～12:00
（日・祝 休診）

予　約　一般診察は予約不要です。
＊印は要予約。

所 在 地　290 Orchard Road
#10-01 Paragon
Singapore 238859

電　話　6734-8871

ファックス　6733-1213

E メール

reception@japan-green.com.sg

- ◆ MRTオーチャード駅より徒歩10分
- ◆ エレベーターは、1階Tower Lift Lobby1をご利用ください
- ◆ 主要各科医師が在籍し検査機器も揃えた総合クリニックです

パラゴン

健康診断ロビー

ジャパングリーンクリニック シティ分院　オフィス街の身近なクリニック

診療科目

外来診察（内科・一般），予防接種，理学療法（疼痛治療・リハビリ等），健康診断，各種医療相談（アレルギー・禁煙・他）

受付時間　月～金　9:00～12:30，14:30～17:30
（土・日・祝 休診）

予　約　ご予約をお願い致します。

所 在 地　1 Raffles Place
#19-02
One Raffles Place
(Tower 1)
Singapore 048616

電　話　6532-1788

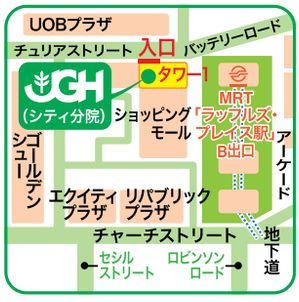
ファックス　6532-7673

E メール

citybranch@japan-green.com.sg

- ◆ MRTラッフルズ・プレイス駅B出口至近
- ◆ オフィスタワー入口はChulia Street側（UOBプラザ前）です
- ◆ お越しの際はIDカード（EP等）をご持参ください
- ◆ 待ち時間を最小限にする予約制を採用

ワン・ラッフルズ・プレイス



歯科はJGHデンタルクリニック（本院内）Tel: 6235 7747

www.japan-green.com.sg

月報

2015

May

＜特　集＞

- **アセアンとシンガポールの生活者像** p02
  HAKUHODO ASIA PACIFIC CO., LTD.
  帆刈　吾郎

- **2015年日本税制改正について～出国税を中心に～** p07
  AGS Consulting Co., Ltd Singapore Branch
  中川　利海

- **シンガポール開発戦略（空と海のハブ化）** p10
  TAKENAKA CORPORATION
  吉田　光夫

- **海外駐在中にご親族に相続があった場合、教育資金の贈与を受けた場合の手続きについて** p13
  Yamada & Partners Consulting Co.,Ltd.Singapore Branch
  東　博士

＜業界ぷらす1＞ 小売り流通

- **「書店の海外展開とクールジャパン」** p17
  Kinokuniya Book Stores of Singapore Pte. Ltd.
  河合　勇佑

＜事務局便り＞

- 4月の行事報告、5月の予定 p30

月報題字: 麗扇会　青木　麗峰
表紙写真: Tokio Marine Insurance Singapore Ltd.　古谷　るくら
写真タイトル: 夕暮れからの街の景色

JAPANESE CHAMBER OF COMMERCE & INDUSTRY, SINGAPORE
10 Shenton Way # 12-04/05 MAS Building Singapore 079117
Tel: 6221-0541 Fax: 6225-6197 Website: http//www.jcci.org.sg

アセアンとシンガポールの生活者像

HAKUHODO ASIA PACIFIC CO., LTD.
Executive Regional Strategic Planning Director 兼
博報堂生活総合研究所アセアン　所長
帆刈　吾郎

はじめに

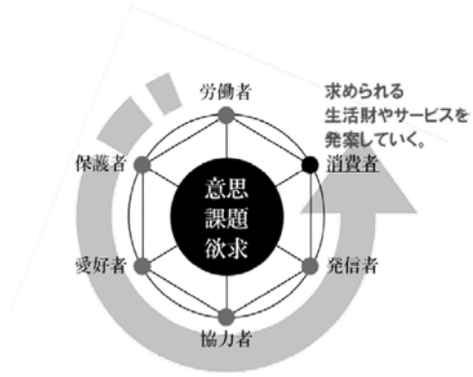
近年アセアン各国は所得水準の高まりにより、製造拠点としてだけでなく消費市場としても注目されています。市場に対してマーケティングを行う際には消費者理解が大事ですが、博報堂では消費者理解を「生活者発想」という考え方で、人々をまるごと「生活者」としてとらえることを大切にしています。そこで今回はこの「生活者発想」という考え方に基づき、アセアン各国の生活者像の一端をご紹介したいと思います。

なぜ、「生活者」？

私たちが商品やサービスのターゲットを考える際には、「潜在顧客」、「来店者」、「サービス利用者」など、もっぱら提供する商品やサービスとの関係性から直線的に理解しようとすることが多いのではないかと思います。

しかし、私たちは（もちろんのことですが）「消費者」としてだけ存在しているわけではありません。私たちは、ある時は同僚と働く「労働者」であり、また子供がいらっしゃる方は「保護者」でもあり、また余暇を楽しむ時には「愛好者」であるともいえます。つまり、私たちは様々な役割や側面を持つ多面的な存在です。これらの多面的な存在を、まずは丸ごと「生活者」としてとらえて、その生活の原動力となる意思や課題、欲求を理解していくことが、結果的にターゲットと商品やサービスとの関係性を深く理解することに役立つと考えているわけです。（図1）

（図1）生活者発想の考え方



生活者発想とは人間を「まるごと」捉え、
「まんなか」を視ること

では、早速アセアン生活者の意識や欲求の一部を見ていきたいと思います。以降のデータは博報堂生活総研アセアンが実施した「アセアン生活定点調査2014」（表1）によるものです。

（表1）
「アセアン生活定点調査２０１４」博報堂生活総研アセアン実施
実施日時　２０１３年１２月~２０１４年１月
対象都市　シンガポール・クアラルンプール・バンコク・ジャカルタ・マニラ・ホーチミンシティ
サンプル数　各都市９００サンプル・計５４００サンプル
対象者　１５~５４歳、　SEC　A/B/C/D層（各国の基準に準ずる）
設問数　１００３項目
方式　訪問面接調査

「未来は明るい」アセアン生活者

アセアン各国の生活者に共通して高く、また日本との差が大きく見られたのが「自分の身の回り、そして未来への明るい見通し」です。（図2）は、自分の将来イメージが明るい、また身の回りに夢や希望が多い、と回答した割合のグラフです。アセアン平均では93%、65%と、日本のスコアの64%、27%と比べて高いことがわかります。

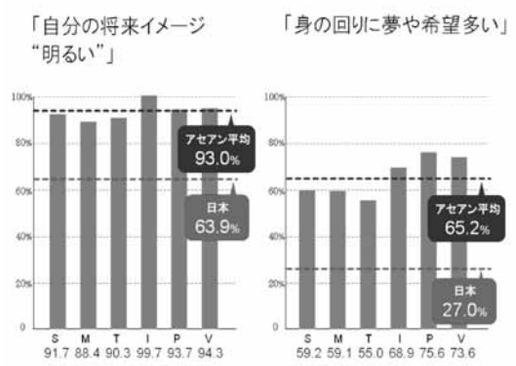
こうした明るい自己イメージ、将来イメージの背景には、経済成長が今後も続くだろうという見通しや、生来持っている自己肯定感の強さなど、様々な要素が考えられると思いますが、アセアン生活者にとって「未来は明るい」のが大前提であり、将来にやや悲観的な意識を持つ日本の生活者と大きく異なるメンタリティーを持っていることを理解しておく必要がありそうです。

「家族大好き」なアセアン生活者

次の（図3）は、家族関係の満足度に関するものです。家族の話し合い、また円満な家族関係への満足度は、いずれも日本のスコアより高くなっています。しかも（図4）からは更に家族の時間を増やしたいという意識が高いこともわかります。

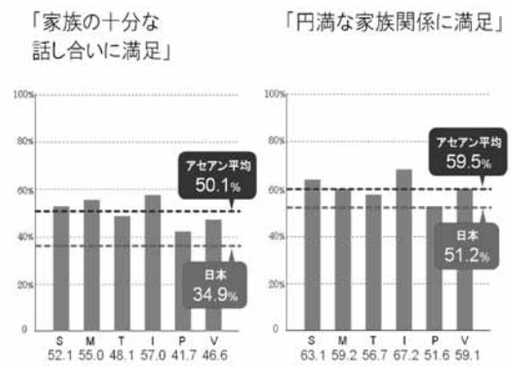
今の家族関係に満足しつつも、更に家族の時間を増やしたいということで、アセアン生活者は基本的に「家族大好き」な傾向が強いことが分かると思います。もちろん日本の生活者も家族を大事にしている人は多いと思いますが、アセアン生活者は私たちの想像以上に家族大好きである、と認識しておく必要がありそうです。実際アセアンの人たちのフェースブックをみると、親子で撮った写真や、家族の集合写真をシェアしている様子をよく見かけるのではないでしょうか。

（図2）

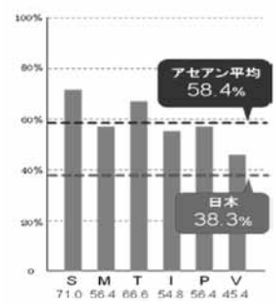


S:シンガポール、M:クアラルンプール、T:バンコク、I:ジャカルタ、P:マニラ、V:ホーチミンシティ
日本は、生活定点2014調査（博報堂生活総研実施）で同様の項目に対するスコア

（図3）



（図4）



「出世したい」アセアン生活者

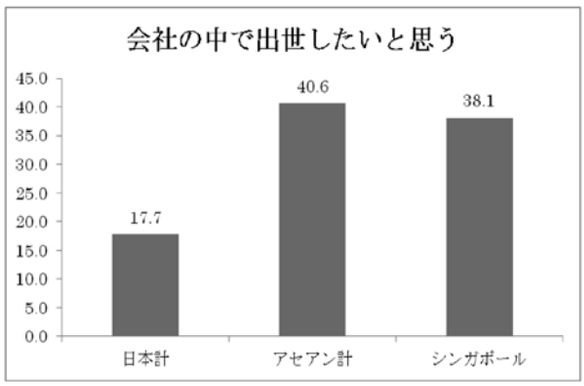
では、一方で労働に関する意識はどうでしょうか？（図5）は同じ会社で仕事を続けたいと思う人の割合（有職者ベース・%）です。日本人の5割が続けたいと回答している一方、アセアンでは3割前後にとどまっています。シンガポールではやや低いですが、それでも3割弱は続けたいと回答しています。確かに日本とアセアンで差はありますが、それでも3割程度は同じ会社で仕事を続けたいと思っている人がいることがわかります。

一方（図6）は、会社の中で出世したいと思うと回答した人の割合（有職者ベース・%）です。日本が2割弱にとどまるのに対し、アセアンでは4割前後が出世したいと回答しています。

日本よりも低いにせよ、同じ会社で仕事を続けたい人がアセアンでも一定数はいること。その一方、出世欲求を持つ人の比率は日本よりも高い。こうしたデータからはいかに離職を防ぐか、会社への定着率を上げる取り組みの示唆ができるかもしれません。

同じ会社内で仕事を続けることを希望している人に対しては、社内にどういったキャリアパスが用意されているのか、またどうすれば出世、キャリアアップができるのか、こうしたことを明確に示してあげることがアセアン生活者の労働意識にかなう可能性があります。シンガポール人含め、アセアン人材の継続雇用には日本人にとっては暗黙的に共有されているかもしれないキャリアパスを明示的に示してあげることが有効なのかもしれません。

（図6）

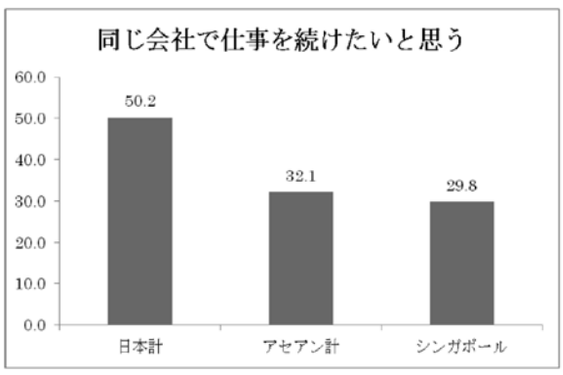


購入判断は、好き嫌い？それとも良し悪し？

では、消費意識はどうでしょうか。博報堂生活総研では、「良い悪いで（合理的に）選ぶことが多い」、「好き嫌いの（好み）で選ぶことが多い」、「ピンとくるか（フィーリング）で選ぶことが多い」と購入判断意識を3類型に分けた質問を過去20年以上に渡り日本国内で聴取し続けています。その推移が下記の（図7）になります。

下の図からは、「好き嫌いで選ぶ」が減少し、「ピンとくるかで選ぶ」が上昇し続けていることが分かります。（良い悪いはおおむね小さい変化にとどまっています。）この結果、現在の日本ではこの3類型がほぼ拮抗したスコアになっていることが分かります。

（図5）



（図7）

出典：博報堂生活総合研究所「生活定点」調査より

（図8）

	アセアン計	シンガポール	マレーシア	タイ	インドネシア	フィリピン	ベトナム
（サンプル数）	(5,400)	(900)	(900)	(900)	(900)	(900)	(900)
ピンとくる・こないという感覚で判断	24.8	21.6	17.6	39.1	24.3	31.3	14.7
一般的に考えて良い悪いの理性で判断	51.0	56.8	61.0	48.9	42.8	40.0	56.3
好き嫌いという自分の好みで判断	24.3	21.7	21.4	12.0	32.9	28.7	29.0

では、アセアン各国ではこの比率はどうなっているでしょうか？（図8）がその結果です。

アセアン全体では半数以上が「良い悪いで（合理的に）選ぶ」と回答しており、日本と比べて2割近く高い割合となっています。この傾向はシンガポール、マレーシア、またベトナムで更に顕著です。

背景には、国民性の違いもあるでしょうし、また日本のようにどんなモノであれ、価格にかかわらず一定以上の品質が担保されている社会と比べ、良いものから粗悪なものまで品質の幅が広い社会であることが影響しているのかもしれません。今後このデータを定点的に追跡することで、アセアン各国の消費意識の変容を見ていくことができると考えています。

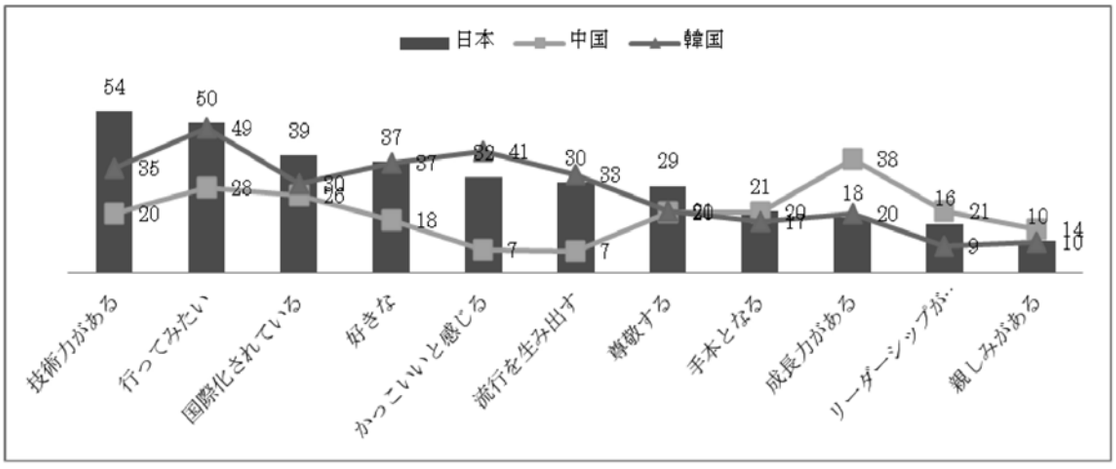
日本は「技術力がある」、では「かっこいい」イメージは？

では最後に、シンガポール生活者の日本イメージを見ていきます。（図9）はシンガポールの生活者が、日本、中国、韓国の各国をどのようなイメージで見ているかを比べたものになります。

日本のイメージは「技術力がある」がトップ。中国、韓国を上回っています。しかし、「かっこいいと感じる」では韓国を下回っています。韓流ドラマやK―POPの影響などもあってか、かっこいいイメージでは韓国が日本を上回っているのが現状です。

今後シンガポール生活者に対して、日本をアピールしていく上では、強みである「技術力」イメージをテコにしつつ、いかに弱みである「かっこいい」イメージについても、キャッチアップしていけるかが重要ということになるのかもしれません。

（図9）シンガポール生活者の日・中・韓イメージ（%）



まとめ

ここまで独自の調査結果から、アセアン生活者の意識や価値観といったものの一端をご紹介いたしました。こうした定量調査をきっかけとしながら、定性調査や行動観察調査などと組み合わせることで背後にある国民性や価値観などをより良く理解することができると考えられます。

アセアン生活者を知ることは、単にマーケティングの成功確率を高めるためだけのものではありません。私たちを取り巻く社会環境を理解することでもありますし、共に活動する仲間を知ることでもあります。また、私たちの競争環境を理解することでもあります。アセアン生活者を理解すること、そしてそれに基づいて適切な活動を行うこと、この重要性を理解し、日系企業がアセアン市場で更に活躍できるようになれば幸いです。

執筆者氏名

帆刈　吾郎（ほかり　ごろう）

経　歴

東京大学　文学部　西洋史学専攻

1995年　博報堂入社　クライアントのマーケティング支援活動に従事。

2013年　博報堂アジアパシフィックに異動。

2014年　博報堂生活総合研究所アセアンを設立。

2015年日本税制改正について～出国税を中心に～

AGS CONSULTING CO., LTD SINGAPORE BRANCH
BRANCH GENERAL MANAGER/ LICENSED TAX ACCOUNTANT
中川　利海

◆はじめに

日本では2014年12月30日に2015年税制改正案（大綱）が公表され、その後本稿執筆現在（3月中旬）において国会での承認可決を待つ状況となっています。近年では経済・社会のグローバル化に伴い、国際税務の改正が少なくなく、在シンガポール日本企業ないし日本人へ影響のある項目も含んでいます。本稿では、2015年税制改正案の主な項目を列挙するとともに、そのうち富裕層のシンガポール移住者へ大きな影響を与えると予想されるいわゆる出国税について、設例とともに解説していきます。なお、本稿執筆現在においては、あくまで改正案であることにご留意ください。

◆主な改正案

税目	内容	備考
法人税	➢ 法人税率の引き下げ	34.62%(現行標準税率)→32.11%(2015 年度)→31.33%(2016 年度)→20%台(今後)
	➢ 欠損金繰越控除の見直し	80%(現行)→65%(2015 年度)→50%(2017 年度)
	➢ 欠損金の繰越期間と帳簿保存期間の見直し	9 年(現行) →10 年(2017 年度)
	➢ 受取配当等益金不算入制度の見直し	
	➢ 地方拠点強化税制の創設に伴う特別償却又は税額控除制度の創設	
資産税	➢ 住宅取得等資金に係る贈与税の非課税措置の延長・拡充	3,000 万円
	➢ 結婚・子育て資金の一括贈与に係る非課税措置の創設	1,000 万円
所得税	➢ NISA の拡充	120 万円(累計 600 万円)
	☆ 出国税	本稿
消費税	➢ 消費税率 10%への引上げ時期の変更等	2017 年 4 月 1 日
	➢ 国境を越えた役務の提供に対する消費税の課税の見直し	
国際課税	➢ 外国子会社配当益金不算入制度の見直し	
	➢ 非居住者に係る金融口座情報の報告制度の整備	
	➢ 国境を越えた役務の提供に対する消費税の課税の見直し(再掲)	

	☆　出国税(再掲)	➢　本稿
納税環境整備	➢　国外居住親族に係る扶養控除等の書類の添付等義務化	
	➢　マイナンバーが付された預貯金情報の効率的な利用の推進	
	➢　財産債務明細書の見直し	

◆出国税について

現在は、日本で多額の含み益のある日本株式等を保有する富裕層がシンガポールに移住しその株式等を譲渡しますと、一定の要件のもと日本でもシンガポールでも課税されません。改正案では2015年7月1日以降の日本からの出国に対し、出国時に株式等の譲渡をしたものとみなし、日本側で所得税を課税するというものです。

◆2015年6月30日までの日本出国の場合

出国税の適用はありません。

◆2015年7月1日からの日本出国の場合

出国税の適用があります。制度の概要は以下の通りです。

(1)　概要

一定の富裕層(※)に対し、出国時に有価証券等の譲渡等をしたものとみなす

(※)有価証券等の評価額1億円以上かつ、出国直近10年内において5年超の日本居住者

(2)　納税猶予と課税の取り消し特例

①海外にて譲渡等なく、10年以内に帰国の場合は納税猶予と課税の取り消し特例あり

②適用要件

●担保の提供

●納税管理人の届出

●届出書の提出(翌年3月15日まで)

③海外にて譲渡等の場合は課税

◆設例1

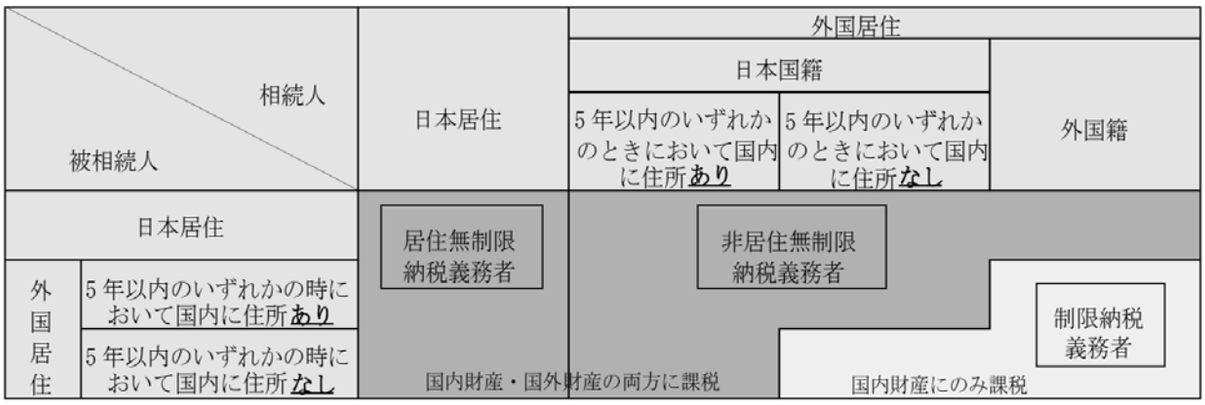
設立時(簿価)	1 億円
出国時(時価)	10 億円
出国時(含み益)	9 億円
出国税(15.315%)	1.4 億円

◆相続税・贈与税への影響について

改正案では、7月1日以降に相続又は贈与により株式等が日本から海外に移転する場合においても、その移転時に譲渡をしたものとみなし、いったん被相続人又は贈与者において所得税を課税したのち、海外に居住する相続人又は受贈者において相続税又は贈与税を課税するというものです。

また、本納税猶予中は制限納税義務者となれないこととされております。制限納税義務者については、本稿の趣旨と異なるため詳細を割愛致しますが、いわゆる親子でシンガポールに5年超移住し、課税財産の範囲を日本国内分のみにとどめるスキームはメリットが出ないことになります。

(参考)相続税、贈与税の課税財産の範囲



◆2015年6月30日までの相続税・贈与税の影響
出国税の影響はありません。

◆2015年7月1日からの相続税・贈与税の影響
出国税の影響があります。

◆設例2

設立時（簿価）	1 億円
相続・贈与時（時価）	10 億円
相続・贈与時（含み益）	9 億円
所得税（15.315%）	1.4 億円
相続税・贈与税（※2）	課税（※1）

※1　相続税・贈与税の課税財産の範囲に含む。
※2　税率は累進税率。(0%～55%)

◆おわりに

近年の日本の税制改正動向をみますと、国際的な流れから法人税率を下げる一方で、財源確保のため、消費税や富裕層を中心とした所得税・相続税の課税強化が目立ちます。また、富裕層向けの税務調査は増加傾向にあります。富裕層のシンガポール移住者については、実務的には今後ますます日本での納税管理人の選定とコミュニケーションが重要になってくるでしょう。

◆参考（他国先行導入例）
①アメリカ
②イギリス
③ドイツ
④フランス
⑤カナダ

執筆者氏名

中川　利海　（なかがわ　としみ）

経　歴

1977年　新潟県出身

1996年　新潟高校卒業

2000年　明治大学政治経済学部卒業、桜井会計事務所入所

以降、KPMG税理士法人東京国際税務部門、AGSコンサルティング東京国内及び国際部門を経て2013年初来星。日系企業を対象に両国の会計税務を中心としたアドバイザリー業務を提供。セミナー講師多数。税理士。

シンガポール開発戦略（空と海のハブ化）

TAKENAKA CORPORATION
Deputy General Manager/ 副所長
吉田　光夫

【はじめに】

去る3月23日、シンガポール建国の父とも称えられる、リー・クアンユー初代首相の逝去の報に接した。1965年にマレーシア連邦からの分離独立がなされて以降、資源もない小国をわずか50年のうちに東南アジアで最も先進的な国家にまで成長させたのは、紛れもなく氏を中心とした、政府主導による諸施策の断固たる実践の賜物である。深い哀悼と共に、シンガポールの発展への貢献に最大の敬意を表したい。

【シンガポールの国家戦略】

前述の通り、資源もない都市国家であるシンガポールの発展施策として推進されてきたのが、積極的な外資の導入によるヒト・モノ・カネの集積、すなわち各方面における、「シンガポールのハブ化」である。結果として、各国企業がシンガポールに自社グループのアジア統括拠点を置くケースが顕著であり、アジアにおけるハブ拠点としての地位を十分に確立していると言って差し支えないレベルである。

今回、建設業に携わる立場として、空港・港湾関連におけるハブ戦略に注目をしたい。

【チャンギ空港】

チャンギ空港の開港は1981年にまで遡る。それ以前はパヤレバ空港が民間空港として利用されていたが、世界の航空需要の増加に伴って、空港の拡張もしくは移転が必要となった事が背景にある。

開港以降、利用客は順調に増加し、それに伴って1991年にターミナル2運用開始、1998年・2000年にはターミナル1増築、2008年にターミナル3運用開始と順次規模は拡大している。また、LCC（格安航空会社）の需要拡大に合わせ、2006年にバジェットターミナルの運用を開始したが、2012年に閉鎖され、解体期間を経て2014年よりターミナル4新築プロジェクトが進行中となっている。

上記の規模拡大だけでなく、東南アジアのハブ空港としての地位を確立するために重要な乗継客の利便性を高めるため、ターミナル1及びターミナル2においては定期的に大規模改修が行われている。この結果として、テナント収入等の非航空系事業での収益が増加し、それによって、着陸料・駐機料の減免を図り更なる就航数増大に繋げるという、好循環が生み出されている。

これらの拡張・改善施策の実践により、乗降客数は順調に増加し、2012年には初めて年間乗降客数5,000万人を突破するに至っている。（2014年の年間乗降客数は5,400万人を突破。）

現在施工中のターミナル4を含め、ターミナル1の開港以来、これまでのチャンギ空港拡張には日系ゼネコンが深く関っている。その背景には、日系ゼネコンがこれまで国内外において蓄積してきた空港建設技術の他、品質管理・工程管理といっ

た面において、高い評価を得られていることがあると推測している。

【シンガポール港】

現在、シンガポール港の管理を司るPSA社の設立は1964年に遡る。当時はPort of Singapore Authority（シンガポール港湾局）として設立され、1997年にPSA Corporationとして民営化されている。

現在、シンガポール港の主要ターミナルはタンジョンパガー・ケッペル・ブラニ・パシルパンジャンの4か所に設けられており、それぞれの規模は以下の通りとなっている。

ターミナル名	タンジョンパガー	ケッペル	ブラニ	パシルパンジャン
埠頭の長さ	2,100m	3,200m	2,400m	7,960m
最大深度	14.8m	15.5m	15.0m	18.0m
コンテナバース数	7	14	8	31
クレーン数	27	40	33	112

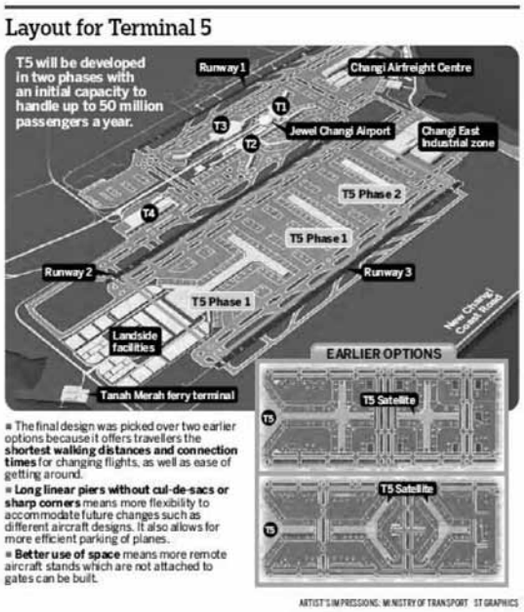
（出典：PSA社　Website）

PSAの発表によると、2014年におけるシンガポール港での貨物の取扱量は3,355万TEU（1TEU＝20フィートコンテナ1個分）であり、2013年比で4.1％の成長となっている。この数字は上海（約3,530万TEU）に次ぐ世界第2位となり、世界の主要港としての地位を維持し続けている。（2005年から2009年にかけては世界1位、2010年に上海に抜かれて以降は世界2位）

この主要港としての地位を維持し続けられる最大の要因としては、その地理的優位性にある。太平洋とインド洋を結ぶ貿易航路上に位置していることから、アジア・ヨーロッパ間を行き来する船舶が必ず通過することになる。これに加え、地震や津波、台風といった自然災害の影響を受ける可能性が極めて低く、また、政府主導（PSA社は政府全額出資）による付加価値の高い港湾サービスの提供といった点もシンガポール港が選択されている理由として挙げられる。

なお、国内市場が狭小であるが故の中継貨物の取扱いは空港の乗継客同様に重要な役割を占めており、2013年における取扱貨物量の約85％が中継貨物となっている。

【今後の空港・海港の開発戦略】



（出典：MINISTRY OF TRANSPORT）

（出典：CHANGI AIRPORT GROUP）

・シンガポール港

タンジョンパガーからパシルパンジャンに至る現在稼働中のシンガポール港を2027年以降西部のトゥアスに全面移転し、跡地を「サザンウォーターフロントシティ」として再開発する。

① タンジョンパガー、②ケッペル、③ブラニ、④パシルパンジャン

（出典：筆者作成）

これらの開発計画は、現在のハブ拠点としての地位に甘んじる事なく、更なるハブ化を推進しようとするシンガポール政府の意志が明確に表れている。

これらの計画が実行された暁には、チャンギ空港における年間収容能力は現状の約2倍となる1億3,500万人になると予想されている。アジアにおいては、バンコクやインチョンなどの国際空港もハブ空港としての地位を目指して拡張が計画・実施されているが、それらをしのぐ規模の巨大な空港が将来的に運営される見込みとなっている。

一方、シンガポール港においても、トゥアス地区への移転によって、年間コンテナ処理能力が現在の取扱量の約2倍となる6,500万ETUに増強される見通しとなっている。これは世界1位を競う上海港を睨んでの戦略だけでなく、海上交通の要衝という点においては近い条件にある、マレーシアのイスカンダル計画の一環として開発が進むタンジュンプレパス港への優位性を保つための戦略でもあると考えられる。

【終わりに】

シンガポールの空港・海港の発展において、その大きな下支えとなっているのは、政府主導の開発戦略にある。国土の約6割に及ぶ国有地を始めとして、埋立による国土拡大を継続的に行い、国土全体の開発計画が綿密に策定されている。小国であるが故の危機意識に基づくスピード感を持った意思決定・実施、そして実施後の付加価値の高いサービス提供こそが、これまでの開発を成功に導いている大きな要因である。

日系ゼネコンはこれまで空港施設・港湾施設の建設・造成に深く関与する事によって、シンガポールの開発政策において大きな役割を担ってきた。2013年に発表された今後の空港・港湾施設の開発は非常に大規模で、またそれに関連する都市再開発計画も随時実施されていくこととなる。

今後も日系ゼネコンがその技術力を大いに発揮する舞台は整えられている。これらの計画を中心として、リー・クアンユー元首相亡き後の新しいシンガポールが今後どのような開発戦略を掲げていくか、注視していきたい。

執筆者氏名

吉田　光夫（よしだ　みつお）

経　歴

1989年に株式会社竹中工務店に入社以降、マレーシア、台湾を経て、シンガポールに駐在。

海外駐在中にご親族に相続があった場合、教育資金の贈与を受けた場合の手続きについて

Yamada & Partners Consulting Co.,Ltd.Singapore Branch
Manager , Japanese Certified Public Tax Accountant
東　博士

1. はじめに

2013年の日本の税制改正により本年（2015年）1月1日から相続税・贈与税の改正が本格的にスタートしました。

特に相続税の基礎控除が改正前の6割に引下げられることにより、改正前はある程度の資産家の方以外は関係の薄かった相続税ですが、今後は都心に持家があり、多少の金融資産がある方は相続税の納税義務が発生する可能性があります。

シンガポールでは相続税に相当する遺産税（Estate Duty）は2008年2月15日以降の相続から廃止され、贈与税（Gift Tax）もありません。

そのため、日本から離れシンガポールで生活をしていると相続税・贈与税について意識されることは無いかもしれませんが、ご家族が日本にお住まいの場合には日本の相続税や贈与税は無関係ではありません。

また、ご親族に相続があった場合には、相続税の申告だけでなく、財産の名義変更手続きなど、様々な手続きが必要となります。

本稿では、シンガポール在住の皆様が特に関心の高いと思われる、

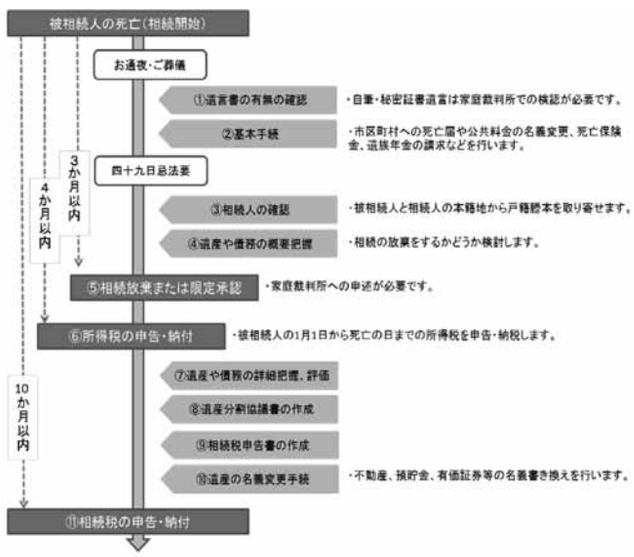
・海外滞在中にご親族に相続があった場合に必用な手続き

・ご両親からお子様の教育資金の援助を受けた場合の日本の税制の取り扱い

について、ご説明いたします。

2. 海外滞在中にご親族に相続があった場合に日本で必用な手続き

日本で相続が発生した場合には大小様々な手続きが必要となりますが、主な手続きの流れは下図の通りとなります。



◆遺言書の有無の確認（①）

自筆の遺言書がある場合には、開封せずに家庭裁判所に検認の申し立てを行う必要があります。また、相続人のうち少なくとも1名は家庭裁判所の検認に立ち会う必用がありますので、立ち会いが可能な他の相続人の方がいらっしゃらない場合は、日本帰国時に対応ができるよう日程調整をされるか、弁護士等へ代理の依頼を検討する必用があります。なお、公正証書遺言であれば検認は不要です。

◆遺産や債務の概要把握（④）

債務が遺産より多い場合には相続放棄や限定承認（相続財産の範囲内で債務を承継する方法）を検討する必用がありますが、相続開始より3か月以内に家庭裁判所で手続きを行う必用があります。

なお、書面郵送による手続きが可能ですが、特に限定承認は相続人全員での申述が必要なことから海外居住の場合には書類の郵送時間を考慮する必用があります。

◆主な各種名義変更等の手続き（②、⑩）

・相続開始から7日以内に手続きが必要なもの

死亡届、火葬許可申請（市区町村役所）

・できるだけ速やかに手続きが必要なもの

公共料金、賃貸住宅の名義変更、引落口座変更（各社）

クレジットカードの解約、各種会員の退会（各社）

・申請期限が比較的長期であるもの

死亡保険金の請求（保険会社）、遺族年金の請求（年金事務所等）

・分割協議書が必要なもの

不動産（法務局）、預貯金・有価証券（金融機関）、自動車（陸運支局等）、ゴルフ会員権等（ゴルフ場等）

※（）は手続きを申請する窓口を記載しています。

この他にも契約の終了や名義変更等に関する手続きは様々あります。銀行口座を見ていただいて定期的に入金、出金があるもの、会員権や免許と名の付くものなどは原則として全て手続きが必要と考えていただいたほうが良いと思います。

大部分の方が未経験のことであり、不安に思われ、また海外滞在中に発生した場合には余計心配になられると思います。

しかしながら、ご本人やご親族以外でも手続き可能なものも多くありますので、税理士・弁護士・司法書士といった専門家やこれ等の手続きをサポートする会社・団体にご相談いただく事も可能です。

3. 海外滞在中にご親族に相続があった場合に海外で必用な手続き

◆相続人が海外居住の場合に必用な手続き

遺産の名義変更や相続税の特例の適用を受けるためには住民票や印鑑証明書が必要となります。通常、海外にお住いの方は出国前に国外転出届を提出されていますので、これ等の書類を入手することができません。

そのため、居住地国の日本大使館が発行する在留証明書やサイン証明書の取得が必要となります。

≪在留証明書の取得≫

原則として申請者ご本人が居住地国の日本大使館で手続きを行います（やむを得ない場合には、代理申請・受領も可能ですが、詳細は日本大使館までお問い合わせください）。

シンガポールの場合、パスポート、氏名・自宅住所の確認できる書類（SP　Servicesの請求書等）を持って日本大使館で手続きを行えば当日入手することができます。

※日本大使館に在留届を提出している必用がありますのでご注意ください。

≪サイン証明書の取得（形式1　大使館公印割印タイプ）≫

担当官の前で署名をする必要がありますので、申請者ご本人が居住地国の日本大使館で手続きを行います。

シンガポールの場合、パスポート、ご自身の署名前の遺産分割協議書を持ってご本人が日本大使館にて署名を行えば当日入手することができます。

◆海外に財産がある場合に必用な手続き

被相続人の遺産の中に海外不動産や海外での預金口座等がある場合には、現地での遺産相続手続きや相続税の有無を確認する必用があります。

≪シンガポールに不動産や預金がある場合≫

日本と異なり、原則として、裁判所の管理の下に遺産の分割手続きを行う必用があります。

具体的には故人の遺産を管理する者が相続開始から6か月以内に裁判所に対して遺産を管理する申し立てを行う必用があります。

この遺産を管理する者は、遺言による指定がある場合には遺言執行人（Executor）が、無い場合には配偶者や最近親者が遺産管理人（Administrator）として裁判所から選任されます。

実際の手続きにあたっては要求される書類等も多いため弁護士にご相談されることをお勧めいたします。

なお、シンガポールと類似の手続きはアメリカ、イギリス、香港、オーストラリアなどの国にもあります。また、シンガポールと異なり、アメリカやイギリスでは各国内にある財産についてはそれぞれの国においても相続税が課されますので、現地での納税及び日本での外国税額控除による2重課税の調整も必要となります。

海外での相続手続きは国にもよりますが、手続きに要する費用が高額となったり、手続き完了までの期間が数年に及ぶこともあります。

また、相続税の申告期限も日本より短いケースもありますので、海外財産の所在についてはご家族で共有され、もしもの時のための対応方法について事前に検討されることをお勧めします。

4. ご両親からお子様の教育資金の援助を受けた場合の日本の税制の取り扱い

シンガポールにおいてお子様に係る学校の授業料等の教育費は、日本において負担する教育費よりも高額になるケースが一般的だと思われます。そのため、ご両親（お子様から見た祖父母、以下「祖父母」）に教育資金の援助をお願いするケースもあると思います。

そこで、祖父母が孫の教育資金を負担した場合に日本の贈与税が課されるかどうかについてご説明いたします。なお、祖父母が日本に居住されている場合には、財産の贈与を受ける方が海外居住の場合であっても日本の贈与税の対象となります。

◆扶養義務者から教育費に充てるために贈与を受けた財産は非課税

扶養義務者から教育費に充てるために贈与を受けた財産は非課税とされており、扶養義務者には配偶者や直系血族、兄弟姉妹が該当し、両親と祖父母の間に優先順位は設けられていません。

そのため、両親ではなく祖父母が直接、教育資金を負担した場合であっても、教育上通常必要と認められる学資、教材費、文具費等の支払い（義務教育に係る費用に限りません）に充てられた場合には日本の贈与税は課されないこととなります。 また、日本人学校に限らず、ローカルの学校やインターナショナルスクールも対象となります。

◆扶養義務者から数年間分の教育費を一括して贈与を受けた場合

上記の非課税の取り扱いは、必要な都度、直接教育資金に充てるために贈与を受けた財産であることが条件となっています。

そのため、数年分の授業料をまとめて贈与を受けた場合や、教育資金の支払いに充てられず、預金や他の用途に使われた場合には日本の贈与税が課されることとなります。

そのため、祖父母に孫の教育のために一括して財産を渡したいというニーズがある場合には、「直系尊属から教育資金の一括贈与を受けた場合の贈与税の非課税制度」を活用ください。

当該非課税制度は、教育資金の贈与を受ける子や孫1人につき最大1,500万円（学習塾等の学校以外への支払いについては500万円が限度）まで、一括で贈与できる制度です。

なお、当該制度の適用を受けるためには日本にある金融機関に贈与資金を預け入れる（信託等）する必要があり、資金の預け入れ前に所定の手続きが必要ですので、ご注意ください。

対象となる教育資金の範囲など詳細は下記文部科学省のHPに掲載されている情報が分かり易いと思いますのでご参照ください。

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2014/08/21/1337560_1.pdf

※当初は2015年12月31日までの贈与が対象でしたが、2015年の税制改正により2019年3月31日まで延長される予定となっています。

5. おわりに

本稿では、相続手続きの主たる部分を簡単に説明させていただきました。実際にご相続があった場合には、故人に対するお気持ちの整理に時間がかかり、また、ご尽力いただいた方々へのお礼やご挨拶に奔走して、相続に関する事務手続きに時間を割く余裕がなかった、という声を多く聞きます。事前に、どのような財産があるのかや、どのような支払いや入金があるのかを知っておくだけでも事務手続きの時間を短縮できますし、心の準備もできるようです。

後半に記載させていただいた、祖父母から孫への教育資金の贈与については、適切な対応を取れば税金がかからないケースもありますので、将来の相続税の節税にもつながります。

昨今、終活という言葉が流行語大賞にノミネートされるなど、ご自身の死後の事を考える話題も多くなってきておりますが、まだまだご家族と相続について話をするのは抵抗があろうかと思います。

しかしながら、万が一の時の必要以上の不安や苦労を軽減するためにも、将来の相続について一度ご家族と話をしてみてはいかがでしょうか。

本稿がその一つのきっかけになれば幸いです。

執筆者氏名

東　博士　（あずま　ひろし）

経　歴

日本国　税理士（通称AZUMAX）
税理士法人山田＆パートナーズに2005年10月に入所し、2014年7月より山田＆パートナーズコンサルティング　シンガポールのマネージャーに就任。
同志社大学　商学部卒

業界ぷらす1
小売り流通

「書店の海外展開とクールジャパン」

Kinokuniya Book Stores of Singapore Pte. Ltd.
Japanese Book Merchandising Department Manager

河合　勇佑

紀伊國屋書店の海外展開

紀伊國屋書店は1969年のサンフランシスコ店開店以来、積極的に海外展開を進めており、今日では世界でもまれな国際書店チェーンとなっています。初の海外出店は1969年のサンフランシスコ店、それ以降北米で店舗を増やしつつ、アジアへの出店は1983年のシンガポール、リャンコート店より始まりました。そして1987年に台湾・台北、1990年にマレーシア・クアラルンプール、1992年にタイ・バンコク、1996年にオーストラリア・シドニー、2009年にUAEのドバイと各国に出店を続けています。

1980年代から1990年代にかけては、後述する日本発のコンテンツの広がりが出店の起爆剤ともなりました。日本の文化に惹かれる現地の方々、また増え続けるアジア諸国の在留邦人の憩いの場となるような、日本の書店をそのまま移植した形での店作りとなっていました。その転換期となったのは1997年開店のバンコク・スクンビット店です。それまでの日本語書籍中心の品揃えから一転、洋書専門店としてスタートし、以降に続く多言語書店への先鞭をつけました。1999年に開店し、皆様にご愛顧いただいているシンガポール本店はその象徴ともいうべき店舗となります。ここで国際的な評価を得たことが、マレーシア・タイ・オーストラリア・台湾・ドバイ・ニューヨークでの大型店舗展開につながりました。そして、店づくり、商品調達に関する経験と多文化というコンセプトは継承され、いずれの店舗も英語・日本語・中国語の他、現地語書籍の販売にも力を入れているところに特徴があります。

-クールジャパンとは

この稿を書くにあたり、自分の中で曖昧だった「クールジャパン」の定義について調べました。クールジャパン開発機構の太田伸之氏は「「クール」が意味するジャンルはとても広い。だからどれをもって「クールジャパン」とすべきか、誰にも定義はできません。」、「大枠として「メディア・コンテンツ」「食・サービス」「ファッション・ライフスタイル」がある。」（太田，2014:47）、「クールジャパン機構は日本の技を売っていきたい。日本のカッコいいを売っていきたい。漫画だろうが、アニメだろうが、映画だろうが、音楽だろうが、みんなが「いい」というものを海外に持っていきたい」（太田，2014:49）1と述べています。また、平成26年12月発表の経済産業省商務情報政策局作成の「クールジャパン機構について」2では、その狙いを「内需減少等の厳しい経済環境→自動車、家電・電子機器等の従来型産業に加えて、「衣」「食」「住」やコンテンツ（アニメ、ドラマ、音楽等）をはじめ、日本の文化やライフスタイルの魅力を付加価値に変える（「日本の魅力」の事業展開）→新興国等の旺盛な海外需要を獲得し、日本の経済成長（企業の活躍・雇用創出）につなげる」としています。

クールジャパンとは、海外で日本文化を格好よく紹介することで、現地で利益をあげて、日本のファンを増やすことのできるもの、といえるのでは

ないかと思います。

-人気コンテンツの移り変わり（1980年代後半～2000年代前半）

上記の定義に即すると、クールジャパンとは最近始まったばかりのものではなく、これまでの日本企業の海外進出と、それに伴う文化伝道そのものともいえるのではないでしょうか。

弊社としていたしましても、これまで書籍、雑誌の販売を通して日本の文化を広げる媒体となってきました。ここではアジアに進出した1980年代からの書店という窓からのぞいたこれまでのクールジャパン、シンガポール・アジア各国で人気となった日本のコンテンツの紹介していきたいと思います。

弊社がアジア出店を拡大した1980年後半～1990年代は、アジア諸国で邦人人口が増加した時期にあたります。と同時に、この年代はサブカルチャーを中心とした日系コンテンツが急速に普及した時期でもありました。音楽でいえばX-Japan　などビジュアル系バンドの登場、SMAPなどジャニーズ系タレントの人気上昇、小室哲哉プロデュース作品などを中心としたダンスミュージックなど様々なジャンルでヒットが生まれ、カラオケの普及もあいまって、日本の音楽産業がアジア各国で認知され出しました。また、「東京ラブストーリー」「101回目のプロポーズ」「ロングバケーション」などドラマの人気もこの時期に最盛期を迎えます。当時日本はちょうどバブル経済のまっただ中でしたが、都会で生活する男女の恋愛模様を描いた「トレンディ・ドラマ」がアジア各国でもヒット。画面の中で表現される当時としては都会的で洗練された日本の生活スタイルが魅力だったようです。それに伴い日本のファッションに対する関心も高まっていきます。1990年後半から2000年代にかけても、ジャニーズの安定した人気、また安室奈美恵や浜崎あゆみという歌姫（ディーバ）、Mr.Childrenといった新しいJ-popの波、L'Arc～en～Cielをはじめとするビジュアル系バンドが多く排出され、またアイドル面ではモーニング娘の登場もあり、日系コンテンツは総体として高い水準の人気を保っていました。

インターネットがまだ普及していない中、海外で日本の音楽やドラマの情報を最も早く、詳しく提供できたのが、「MYOJO」「JUNON」「POPOLO」などといった芸能雑誌や「TVガイド」「TV　FAN」といったテレビ誌、また最新のファッション情報を供給したのが「JJ」、「ViVi」、「Can cam」といったファッション誌でした。このような日系コンテンツの優位は、2000年代後半に日本に先駆けてアジア各国で活動を始めたK-popやドラマを中心とする韓流に押されるまで続きました。

また、「ドラゴンボール」「セーラームーン」を代表とするコミックを中心としたアニメコンテンツが爆発的に広がったのも1980年代からです。当時はまだ現地の印刷技術もそれほど進んでおらず、また版権の取引も盛んではなかったことから、粗悪な海賊版を除いては漫画を読むことができるのは日本からの輸入品のみでした。その後は状況が徐々に変わって海賊版防止という目的もあり版権売買が活発化、アジア各国でも現地語の翻訳が安く、日本での出版からも数ヶ月で読める、というような状況になっています。1990年代後半には2015年現在でも人気の「ワンピース」や「ナルト」などが生まれ、ファンを引き付け続けています。

この他にも、「ベストカー」や「CARトップ」、「ハイパーレブ」といった車雑誌は美しい写真とその情報量が、現地のマニアにとっても貴重な情報源となってきました。また、型紙がついた高品質な手芸書は手先の器用な人の多いアジア諸国で大きく受け入れられてきました。2000年代後半には宝島社が火付け役となったバック付きの雑誌やムックが特にシンガポールでは大ヒット、例えば「イブサンローラン」は約4,500部をシンガポール国内で販売しました。これは3店舗という規模から見ても異例の売上で、日本国内でもここまでの売り上げを上げた店舗はありません。

まとめると、言葉のいらない視覚性の高い書籍・雑誌が現地の方々に受け入れられ、日本文化、品質の熱心なサポーターを生み出し続けてき

ました。

-人気コンテンツの移り変わり、消費スタイルの変化（2000年代前半から2010年代に入って）

文化的な側面では、2000年代後半から2010年代にかけて技術革新の恩恵でその伝達が早くなり、大きく様相が変わっています。インターネットの普及によりスキャンレーション（書籍のコピーを違法にインターネットにアップロードするもの）といった手段での情報共有が容易になりました。娯楽も多様化し、シンガポールのみならず、アジア各国で急速に普及したスマートフォンやタブレットの普及により、可処分時間の奪い合いもより激しくなっています。

日本発のコンテンツもアジア各国での様々な形で手に入れやすくなっています。版権売買で翻訳が活発しているため、収益は海外の出版社にも流れているものの、コンテンツ自体は広まりやすい環境になっています。ファッション誌では「Vivi」が英語（マレーシア版）・中国語・タイ語で、「S Kawaii」は中国語・タイ語で刊行されています。コミックも翻訳版の刊行は早く、「ワンピース」や「ナルト」といった人気作は英語はもちろん、中国語・タイ語・マレー語といった各国語で翻訳版が出るようになりました。いずれも比較的安価に手に入れられるようになっています。それに伴い、日本からの輸入部数の伸びは鈍化してきています。ジャニーズやアーティストの人気は下火となり、輸入書籍の売上としては漫画・アニメがより大きな比重を占めるようになりました。

反面、2010年に入って、これまで日本国内需要で成り立ってきた出版、アニメコンテンツ産業では、版権売買では収益が上がらないため、徐々に海外展開に目を向けつつあります。自社での英語版出版に舵を切った小学館Asia、カードゲームを柱に強力に海外展開を続けるBushiroadがその代表格となります。ローカル顧客の売れ行きの傾向としては、熱しやすくさめやすい、また選択的で各作品の人気の差が大きいようです。パターンとしては日本でもトップクラスのアニメが、現地でも人気となる傾向にあります。情報を自分で探さなくてはいけない海外と、情報があふれている日本では人気の出方、持続にも違いが出ているようです。

コミックやフィギア等関連商品の売れ行きを観察していると、アニメ化が作品人気の拡大に大きく影響しています。世界ではインターネット動画サイトにアニメ違法アップロードが数多くあり、日本での放送の数時間もたたないうちに、字幕つきで視聴できる環境が整っています。そこで、2014年10月には現在タダ乗りされているアニメコンテンツでいかに収益を上げるかという観点から、クールジャパン機構が出資し、バンダイナムコホールディングス（コンテンツ・玩具製造販売）、アサツーディ・ケイ（広告代理店）、アニプレックス（アニメ制作会社）の3社を中心に、アニメコンソーシアムジャパンが設立されました。業務内容は日本と時差なしの新作アニメ放送、過去作品の多言語版配信、関連商品のECサイトの展開です。

また、めざましいイベントとしては、Anime Festival Asiaが挙げられます。アニメの祭典として2008年にシンガポールで始まり、以降インドネシア・マレーシアで開催、2014年11月のシンガポール開催では9万人のアニメ・コミックファンを集め、順調に成長しています。2015年にはタイにも進出予定です。日本発アニメコンテンツの紹介ブースや、物販、アニメ声優のコンサートに参加する貴重な機会でもあり、東南アジアを中心に国をまたいだ熱心なファンが足を運んでいます。

こうした動きは海外での日系コンテンツ普及に好影響を与えており、弊社としても広がり深化する現地のファンの興味にこたえるべく、トレンドに沿うように常に品揃えを変化させ続けています。

-どのように書籍を売っているのか

先述したとおり、弊社は多言語書店を標榜し、現地の方々にも広く受け入れられるようになりました。ここでは、主にシンガポールの状況についてご説明します。

旗艦店であるシンガポール本店では、現在英語・中国語・日本語・ドイツ語・フランス語を扱っています。言語、分野によって売り場を分けて、それぞれに幅広く、深い品揃えを志向、日本、現地の方々、各国からの駐在員、近隣諸国からの旅行者という幅広い客層から支持を得ています。売り上げの割合では、8割が英語、残りを中国語、日本語が各1割弱、ドイツ語とフランス語が残りの割合を占めています。

決して安売りをせず説得力のある品揃えで、落ち着いた雰囲気の中で本をお選びいただく、という事も常に意識しています。シンガポールの4店舗、また海外の多くの店ではシンガポールの著名な建築家、ケイニー・タン氏により設計され、それぞれのお国柄、地域事情によりテーマは異なるものの、基本部分は統一したデザインで「Books Kinokuniya」のイメージを深めています。たとえば、2014年11月に移転をしたシンガポール本店は長年愛された移転前の店舗を踏襲しつつ、茶室や灯篭、町屋作りといったキーワードで日本建築のエッセンスを取り入れています。今度ご来店いただいた際に、書棚や床、店内装飾に少し意識を向けていただけましたら面白い発見をしていただけるのではないかと思います。

とは言え、安売りはしないといえども、社会的に意義のあるもの、新作が待たれている人気作家の作品には、より多くの方に手を取ってもらうべく割引を付与しています。また、有料会員サービスでは、常時お値引きに加えて会員向けセールも開催することで、ご好評をいただいています。

商品を魅力的に演出する陳列も重要な点です。お客様がご来店された際にどのように店内を動かれるか、その興味分野が有機的につながるように棚を配置し、その棚の中でもどの本がどの本と関連性があるかに気を付けています。作品、作家ごとでいえば、複数言語で翻訳があるときには、一緒に並べることで世界の広がりを見ていただきます。たとえば、村上春樹の新作が出る際には（日本語、中国語、英語の順番で出るのがセオリーです）最後の英語版が出る時には三言語の版が並びます。売り場単位では、コミックコーナーは日・英・中の3言語が交差する場所に位置し、少し移動するだけで「ワンピース」や「NARUTO」の各国語版を探すことができ、また「バットマン」といったアメリカンコミックも一堂に展示し、テーマである多文化を体現しています。また、フィギュアや小物といった関連キャラクター商品との相性もよく、弊社としても書籍に限らず商品を置くことでより作品を楽しんでいただけるように、構成に工夫を凝らしています。

日本からの雑貨や文房具も書店に欠かさざる商品群として、日本人学校の採用品も含めてご愛顧をいただいています。

また、弊社では従来より「Bookweb」という各国で書籍のオンラインショップを展開してきましたが、2014年8月開始のシンガポールを皮切りに各国で「Kinokuniya　Webstore」に衣替えし、書籍にとどまらない日本のクールなものを扱う総合ショッピングサイトを運営しています。販売の新たなチャンネルとして、また店舗という物理的な制約から離れ、より幅広く面白い品揃えを提供すべく日々新しい商品を紹介し続けています。

-最後に

書店はコンテンツの広まりにおいてもっとも川下に位置しており、独力では大きな流れを作ることができません。その反面、お客様の直の声を聴くことができ、いまや書籍に限らない幅広い商品群の中から品揃えに反映させることの出来る場となっています。これまでご紹介してきましたとおり環境は変わり続けていますが、原則はこれまでと変わらず、トレンドと現地の需要に敏感に反応しながら書店として質の高い活動を続けることで、

娯楽としてのお買い物体験を提供し、日本発の会社としてクールジャパン推進の一翼を担ってまいる所存です。

引用文献

1.　太田伸之（2014）『クールジャパンとは何か？』ディスカヴァー21

2.　経済産業省 商務情報政策局「クールジャパン機構について」2014年12月
http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/creative/141211CJfandDecember.pdf　2015/3/15参照

執筆者氏名

河合　勇佑（かわい　ゆうすけ）

経　歴

1981年兵庫県生まれ。大学卒業後紀伊國屋書店に入社、大学・公共図書館営業、書店勤務、バンコクの日本語書籍売場の担当者を経て、2011年8月にシンガポールに赴任。現在はバイヤーとして日本語書籍と周辺商材の開発を担当している。

JCCI 3-4月イベント写真

3月28日　A Tribute to Our Founding Prime Minister, Mr Lee Kuan Yew (Condelence ceremony)

4月7日　4月会員講演会

4月20日　運輸通信部会　部会総会

4月14日　理事会

JCCI Singapore Foundation

2014 年度 寄付先団体・奨学生 インタビュー

連載第 4 回:

NUS Centre For the Arts
Ms. Lim Huimin
Ms. Janice Chen

NO4: MAY, 2015

シンガポール日本商工会議所基金「2014 年度募金」より、寄付金授与が決まった１１の団体と留学生達の素顔を員の皆様に幅広くご紹介すべく、月報 2 月号より始まった当連載。第 4 回目は拡大版として、シンガポール国立大学の付属機関である NUS Centre For the Arts (CFA) に加え、現在 JCCI 基金から奨学金を得て就学中である留学生 2 名（2015 年 7 月帰国予定）にもインタビューを行いました。

NUS CENTRE FOR THE ARTS (CFA)

シンガポールや海外のアーティスト・団体とのパートナーシップを通じ、シンガポール国立大学コミュニティ内外での学習、芸術鑑賞、研究を推進している団体。

1. What is "NUS Centre For the Arts"?

Established in 1993, NUS Centre For the Arts (CFA) believes that the arts and higher education have shared goals of building knowledge and nurturing an inquiring spirit. CFA nurtures 23 student arts groups and develops the key arts centres – University Cultural Centre, NUS Museum, Runme Shaw CFA Studios, and selected arts spaces at Stephen Riady Centre, University Town.

Through its partnerships and programmes such as museum exhibitions, NUS Arts Festival and ExxonMobil Campus Concerts, CFA promotes research, learning and appreciation of the arts, and encourages multidisciplinary collaboration with the NUS community of students, staff and alumni.

2. What are the objectives of running the annual NUS Arts Festival (NAF)?

Inaugurated in 2006, NUS Arts Festival is an annual celebration of the arts on campus featuring the works of professional artists and student artists in collaboration with local and international professional artists. A contemporary youth-driven Festival – organized by youth, with youth and for youth – the Festival endeavors to engage with the issues of the day which concern our young people today, issues which will become more pressing and will shape their future. Its key objective is to raise awareness of issues and engagement with these issues with the arts and through the arts.

The Festival is unique in that research forms the spine of the creative process. The Festival has worked with different NUS faculties since 2007 such as Faculty of Engineering's Mixed Reality Lab, Yong Loo Lin School of Medicine, Faculty of Arts and Social Sciences, Faculty of Science and Global Asia Institute by consulting researchers and academics to present novel insights with the artists' touch.

3. How does NAF contribute in creating a platform for cultural exchange between Japanese artists and local young talent?

In 2014, our student dancers had the privilege of working with Ms Akiko Kitamura, an acclaimed Japanese choreographer on *Emotional Strata*, which was part of Festival opening show *Overdrive: A Triple Bill*. This piece, conceptualized and choreographed by Ms Kitamura and

restaged with our students, investigated how perception of objects have changed in our consumerist society, heightened by the catastrophe such as the Great Tohoku Earthquake in March 2011. The creative process included sharing the experiences on the aftermath of the disaster, and this gave new perspective to our student dancers which added a dimension to the actual physical training in dance. Our students were given access to new dance vocabulary and were further stretched in their skills.

In an interview with a local newspaper in February 2014, Kitamura says "Collaboration leads us to learn about individual backgrounds. It leads us to the situation where we are faced with thinking about new details because there are different ideas melting together."

We sincerely look forward to greater opportunities like this to work with other Japanese choreographers.

4. **Which are the Japanese artists and works that had been featured during the NAF so far?**

Some of the highlights in the past Festivals includes:

a) **Overdrive: A Triple Bill - Emotional Strata** and **To Belong –cyclonicdream–** by Akiko Kitamura (2014)
b) **Soirée 2013** by NUS Harmonica Orchestra (2013)
c) **Hereafter** by NUS Dance Synergy (2012)
d) Inspiring Japanese films screened at the festival include: **Tampopo** (1985), **Sumo Do, Sumo Don't** (1992), **Detroit Metal City** (2008), **Nodame Cantabile I & II** (2009 & 2010) and **Jiro Dreams of Sushi** (2011)

We are very thankful for the rewarding and enriching experiences the students have gained through the collaborations with the artists and we certainly look forward to more partnerships and cultural exchanges in the future.

a) Photo above: Guests and performers at post-show reception of To Belong –cyclonicdream– (Ms Akiko Kitamura, 2nd from right)

b) Photo below: Mr Yasuo Watani is one of the world's leading chromatic harmonica soloists. Mr Watani has won the First Prize for both the International Harmonica Competition in the Netherlands (1988) and the 2nd World Harmonica Competition in the Championships and Festival in Trossingen, Germany (1989). Back in Japan, he received the Kyoto Cultural Award and two Japanese Music Awards. He performed alongside, Maestro Ms Josephine Koh in Soirée 2013.

c) Photo below: A dance theatre that looked at the trauma experienced by the victims in the aftermath of the Japanese tsunami. Alternating between mourning for the dead and carrying out damage control, the dancers portray the panic and desperation as survivors attempt to restore what's left of their beloved country. The audiences are taken through the different perspective through one female dancer - her innocence and quiet helplessness as she searched for her father amidst the chaos around her. What ultimately provided the strength to move forward hereafter are the strong sense of community and the power of memories that offer hope.

MS. LIM HUIMIN

立命館アジア太平洋大学　奨学生
（September 2014- July 2015）

Lim Huimin, a post-graduate of Nanyang Technological University (NTU) majored in Chinese and minored in Translation, had been awarded with Ritsumeikan Asia Pacific University (APU) One-year Study Program by JCCI in year 2013. She has great interests in learning about different cultures, especially Japanese culture and the language. She believes that by understanding the cultural differences between Japan and Singapore and having a good grasp in Japanese language, it can help her in doing her humble part to promote mutual understanding between the two nations in the future.

1. **Among all the courses that you have taken at the university in Japan, which is/are your favourite course(s) and why do you like it/them?**

My favourite course has to be the tea ceremony course. It has always been my goal to learn about Japanese traditional arts and this course provides a perfect introduction into tea ceremony, with meanings behind every action fully explained, and also allowed hands-on practices for us to truly be engaged in this ancient art. I have also joined the school's tea ceremony club but different situations call for different behaviours and it is definitely an eye-opening experience to be involved in something that dates back to hundreds of years ago. Because the class is small, and is conducted in a traditional tea room, it fully allows us as students to savour and experience the Japanese way of tea, which I believe cannot be easily found elsewhere. The tea ceremony course is also very different from the lectures and tutorials and it is refreshing to take part in something so different from normal classes.

2. **In what ways has this scholarship program helped to better your understanding about Japan, its culture and people?**

Firstly, this program provided almost everything needed to embark on an amazing journey to learning. With insurance, housing funds, transportation allowances and daily expenses covered, I did not have to worry about a single thing regarding finances, nor do I have to work part-time to support myself here.

Secondly, this program gives the scholar the freedom to choose what kind of journey he or she would like to embark on, and did not impose any restrictions or requirements on what I want to experience. For me, it's about traditional arts, but you can also choose to study about the sports in Japan, or the economy, or the social sciences etc.

Thirdly, many programs only offer a semester, but with one year I can engage in more activities. I feel that many students who are only here for a semester had a less fulfilling experience than I do.

3. **With this scholarship experience in Japan, how you would want to bridge yourself between Singapore & Japan in future?**

I believe that cultural exchange is very important between Singapore and Japan. There are many exchange programs taking place between the two, such as school visits to universities in both countries, and the increase in tourism. In the near future, what I can do is very limited, but I hope to at least

Thank (you) JCCI for the sponsorship for this unforgettable study experience in Japan!

be able to volunteer for free tours around Singapore for Japanese tour groups to spread the rich local history and culture to them. I would also promote more interaction between students of both country by taking part in NTU's program for Japanese students, and do my part to bridge relations between Singapore and Japan in the future.

4. **Would you encourage your juniors or friends to apply for this scholarship? Why is it so?**

Definitely. As I have mentioned earlier, this scholarship covers almost all financial aspects of life in Japan, hence the scholar can embark on the journey worry-free and able to focus on learning. The freedom and amount of time here is also indisputably better than many other scholarships provided. This scholarship to APU also provides the scholar an insight to a globalised Japan, as APU is the university with the highest percentage of international students in Japan. Overall, although competition for this prestigious scholarship is very strong, I will definitely recommend anyone who is interested to study and live in Japan to apply for this scholarship. I would like to take this opportunity to thank JCCI for the sponsorship for this unforgettable study experience in Japan!

The photo of left page: With my Tea Ceremony Club (Sado-bu) Sensei.

Left column photo: Entrance ceremony for fall semester 2014.

Right column 1st photo: Giving a presentation in Japanese language class regarding my home-stay in Nagoya.

2nd photo: Taking a photo as a memento during the final session of tea ceremony class.

3rd photo: Photo with the iconic two "towers" of APU.

MS. JANICE CHEN

早稲田大学　奨学生
（September 2014- July 2015）

Janice Chen Huiqi, a post-graduate of National University of Singapore (NUS) majored in Japanese Studies, had been awarded with One-year General Study Scholarship Program to Waseda University by JCCI in year 2013. She believes that as a Japanese Studies major, studying in Japan would be an important experience for a deeper understanding of Japanese culture and history. This scholarship would a valuable foundation for her graduate studies in achieving her goals whereby she could contribute in some ways that helps in better understanding between Singapore and Japan in terms of communication and ways of thinking.

1. **Among all the courses that you have taken at the university in Japan, which is/are your favourite course(s) and why do you like it/them?**

The most intriguing course that I took during the Fall Semester was Modern Political Thought. It is a class far removed from my own major (Japanese Studies). Having an instructor who was engaging and insightful greatly contributed to the experience of the class. His classes were always thought-provoking and stimulating. After every class, instead of getting answers, I have more unanswered questions and that does not seem to frustrate me. I like how the class encourages students to think more about our own lives and our place in society, at the same time, apply what we have learnt and studied in class into contemporary context. I also get to interact with my classmates and bounce ideas off from each other with our discussions.

2. **In what ways has this scholar program helped to better your understanding about Japan, its culture and people?**

Japan, especially Tokyo, is an exhilarating place to live in. Tokyo has a good mix of culture, tradition and modernity. Just by living in Japan, I have learnt so much more about Japanese customs and manners. Even day-to-day mundane activities, such as grocery shopping, riding the subway and such, all add up to my understanding and appreciation of the Japanese culture and its people.

In Tokyo, I am fortunate enough to be able to meet an array of people – Japanese and foreigners alike. It makes me appreciate the opportunity that I have right now to be meeting all these people. I have learnt that no matter where we come from, humans are fundamentally the same on the inside. We may have different upbringings, speak different languages and have different opinions on different matters, but ultimately, our basic essence as humans remain the same. I find that to be rather comforting and amazing at the same time.

3. **With this scholarship experience in Japan, how you would want to bridge yourself between Singapore & Japan in future?**

I think as a Singaporean who has studied and lived in both Singapore and Japan, I have gained a better understanding of what are the pros and cons of each country. There are several things that Singapore can learn from Japan and vice versa. I hope that in the future, I will be in a position whereby I am able to contribute in some ways that helps in better understanding both countries in terms of communication and ways of thinking. Finding employment in a company that has operations in both countries seems ideal for now.

I have learnt that no matter where we come from, humans are fundamentally the same on the inside.

4. **Would you encourage your juniors or friends to apply for this scholarship? Why is it so?**

Definitely! The One-Year General Study Scholarship to Waseda University by JCCI gives you the opportunity to not only experience living in Japan, it also gives you the academic freedom to explore subjects that you have yet to explore. At the same time, you will meet people and have experiences in such a way that will challenge your current way of life. I think these are life experiences that everyone should try and make in their lifetime and this scholarship will help make that happen. Go forth and apply!

Photo above: Vibrant campus life is one of the highlights in Waseda. This is a picture of a lunch-time performance put up by Waseda students in a lead up to the annual Waseda Festival that happens every November.

Photo below: Part of studying overseas is also making friends and having a good time over meals. Pictured here is my classmates for one of my Japanese classes.

(On the right row, Janice is seated third from the back.)

今回は 1 団体と現在留学中である 2 名の奨学生のインタビューをお届け致しましたが、いかがでしたでしょうか。

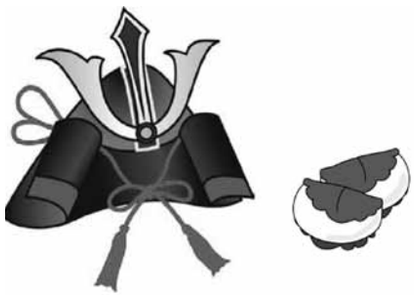
NUS CFA では毎年開催しているアートフェスティバルにおいて、ゲストとして招いた著名アーティストと学生が、音楽やダンス等を通じてコラボレーションをしています。これまで JCCI 基金の賛同によって、日本人を含む多くの著名アーティストの招聘が実現してきました。単に日本の芸術をシンガポールに広めるというだけではなく、若い学生達と一緒に日本のアーティストが競演することは、育成という観点でも非常に有意義な取り組みかと思います。

また立命館アジア太平洋大学に留学中の Lim Huimin さん、早稲田大学に留学中の Janice Chen さんは共に勉学や日々の生活を通じ、充実した日々を送っているようです。残り数ヶ月となりましたが、帰国後は日本で得た経験を糧に、社会に大きく羽ばたいていくことを願っています。

次回月報 6 月号では、寄付先団体の一つである Singapore Symphony Orchestra と、今秋から留学に旅立つ奨学生 2 名にインタビューを行います。お楽しみに！

シンガポール日本商工会議所

事務局便り



≪ 4月度　活動報告 ≫

運輸・通信部会主催講演会　ASEAN主要国における日系企業のIT利用実態と方向性」

3月23日、運輸通信部会主催で、「ASEAN主要国における日系企業のIT利用実態と方向性」という題で、野村総合研究所の清水大輔氏をお招きし、ご講演を頂きました。特に社内でIT関係のお仕事に就かれている方が多く見受けられ、全部で53名の方にご参加を頂きました。

運輸通信部会　部会総会

4月20日、日本人会にて、2015年運輸通信部会の部会総会が開催され、15名の方にご参加頂きました。2015年度は、部会長にNTT DATA Asia Pacificの深谷良治様、副部会長にはMitsui O.S.K. Bulk Shippingの園部俊行様にお勤め頂く事となりました。2014年度の活動報告、2015年度の活動案が話し合われました。

≪ 2015年5月　行事予定 ≫

開 催 日	開催区分	イベント名	時間・場所
5月5日（火）	部会	第2工業部会　懇親ゴルフ	12:00-21:00 TMCC
5月7日（木）	会員サービス 委員会	5月度会員講演会 「2015年海外渡航リスクとその対策」	15:00-17:00 日本人会
5月8日（金）	部会	5月広報委員会	12:30-14:00 Grand Park City Hall
5月12日（火）	理事会	5月度運営担当理事会 第539回理事会	11:30-12:14 12:15-14:00 日本人会
5月13日（水）	部会	建設部会　部会総会	15:30-17:00 日本人会
5月19日（火）	会員サービス 委員会	5月度会員講演会 「ミャンマー法実務のQ&A－外国投資法制，労働法制を中心に－」	15:00-17:00 日本人会

※予定は事情により変更・追加されることがございます。

月報

May, 2015

（左：沼田様、右：古谷様）

＜編集後記＞

3月23日早朝、シンガポール建国の父であるリー・クァンユー元首相逝去のニュースが島内を駆け巡りました。朝から記帳所に向かう長蛇の列、いつもは明るいシンガポールの友人の曇った表情、街中に溢れる故人の姿、国葬の日の静けさから、いかに国民に尊敬されてきたリーダーであったのかを偲ぶことができました。私たちがこの地で安全に経済活動できることに感謝しつつ、ご冥福をお祈りしたいと思います。

＜3月号担当　広報委員紹介＞

○名前　沼田宏光
○出身　京都府
○在星歴　2013年1月より赴任
○会社名　Hakuhodo Consulting Asia Pacific Pte. Ltd.
○仕事内容 Marketing Consultancy
○趣味　スポーツ鑑賞
○シンガポールのお気に入り　寒くないこと、色々な国に手軽に行けること
○月報読者の皆様へ
読者のみなさんのご興味と寄稿してくださる方々の知の最適な出会いを作り出すのが、われわれ広報委員の役目だと思っています。ぜひ、ご感想やご意見をお近くの広報委員またはJCCI事務局のみなさんまでお寄せください。

○名前　古谷るくら
○出身　千葉県
○在星歴　2013年7月より赴任（2015年4月1日付けで帰国）
○会社名　Tokio Marine Insurance Singapore Ltd.
○仕事内容 日系企業向け法人営業
○趣味　映画鑑賞、旅行、写真、ヨガ、ゴルフ（初心者）、食べ歩き、飲み歩き
○シンガポールのお気に入り
タイガービール、サテー、バンブークラム、ラオパサ、ボートキー、デンプシーヒル、ボタニックガーデン
○月報読者の皆様へ
2015年5月号の編集を最後に、日本へ帰国となりました。シンガポールに滞在中の2年間、JCCI広報委員のメンバーとして、東南アジアを中心とした様々な情報に触れる機会がもて、自分自身、大変勉強になりました。今月号ご執筆をいただいた皆様に厚くお礼を申し上げますとともに、読者の皆様におかれましては、是非今後ともJCCI月報をご愛読いただけますと幸いです。

発行

JAPANESE CHAMBER OF COMMERCE & INDUSTRY, SINGAPORE
10 Shenton Way #12-04/05 MAS Building Singapore 079117
Tel: 6221-0541 Fax: 6225-6197
E-mail: info@jcci.org.sg
Web: http://www.jcci.org.sg

印刷

TOH-SHI PRINTING SINGAPORE PTE LTD
4 Ayer Rajah Crescent, Singapore 139960
Tel: 6775-2555 Fax: 6775-1661

会員データーベース　訂正・変更記入フォーム

会員データーベース登録内容に訂正・変更がございましたら、下欄にご記入の上、事務所まで FAX または E メールにてご連絡頂きますよう、御願い申し上げます。

注：＊必ず会社名と E メールはご記入下さい。

会社名(日)			
会社名(英)＊			
旧代表者名(日)			
新代表者名(日)		新代表者名(英)	
E-MAIL＊			

役職(英)		役職	
Address			
TEL:		業務内容	
FAX:			
WEB:			
日本人社員数		総従業員数	
変更日	年　　月　　日　より		

緊急連絡 E メール：

その他

Fax: 6225 6197

担当：ドリス(doris@jcci.org.sg)

ベルリッツランゲージセンター

Helping the World Communicate

1878年のマクシミリアン・ベルリッツによる設立以来、何千万人もの人々が、ベルリッツ・メソッドを通して言語を訳さずコミュニケーションの中で外国語を習得してきました。ベルリッツは、１世紀以上もの間、「思いを伝えたい」という皆様を支援してきました。現在、世界70ヶ国に550以上のランゲージセンターを持つベルリッツは、130年以上に渡り卓越した言語サービスの代名詞となっています。

ベルリッツ コース

- 英語、中国語、アラビア語、フランス語、ドイツ語、韓国語、スペイン語などのレッスンを提供
- 短期集中 コース
- プライベート コース
- セミプライベート コース
- グループ コース

電話レッスン

- 1 レッスン30分間・24時間年中無休=空いた時間に気軽に受講可能
- プロのベルリッツ教師との実践的なレッスン ・毎レッスン後に教師からのレッスンレポート有
- 20業界・218の職種から学習内容の選択可能（あなたのビジネスと語学学習が連携する学習システム）
- 受講内容がオンライン教材とリンクしているので効率的に予習復習が可能

BVC (Berlitz Virtual Classroom)

Online convenience - Berlitz expertise

忙しく通う時間が無い方、海外出張や一時帰国が頻繁に発生し定期的な通学が困難、という方に特にお勧め。SkypeやGo To Meetingを通して、自宅やオフィスから教室に通学するのとまったく同じ感覚で受ける教師とのオンライン・ライブレッスン。対面のときと全く同じ教授法、カリキュラムを採用。

ベルリッツ・
ランゲージセンター

391 B Orchard Road, #16-01/02 Ngee Ann City Tower B
Tel：6733- 7472　　E-mail：study@em.berlitz.com
お問い合わせは日本語でどうぞ

JCCI
SINGAPORE